昭和39年11月10日第三種郵便物認可　昭和41年4月5日国鉄東局特別扱承認雑誌第2343号　昭和42年9月1日発行　第4巻第9号通巻第37号（毎月1回・1日発行）

月刊漫画

ガロ

No.37
1967
9月号

創刊3周年記念特大号



カムイ伝㉝　赤目プロ作品　白土三平

鬼太郎夜話④　水木プロ製作　水木しげる

(前回まで)　　カムイ伝㉝

かねてより窮乏財政の危機を深めつつあった日置藩では、既にこれを打開するための万策を講じてみたものの妙策なく、ついに、みずから許可して墾させた新田畑に対する課税に食指を伸ばした。その下準備として、**正助**らが開発した花巻村の新開地に測量の足を踏み入れたのであった。ところが、新田開発によって醸成された土地に対しては､これを広く奨励する意味で､開発してより爾後数年間は鍬下年季と称する免税期間が与えられるのが通例であった。花巻村の新開地は、現在わずかに最初の収穫を得たのみであって､鍬下年季が始まったばかりである。明らかに藩の横車であった。

そこで、この開発工事に血涙をそそいだ百姓たちは、自分らの土地を守るべく、本能的に立ちあがった。彼らは、測量に入った役人を新開地から追い出すために、一団となって新開地へ向かった。だが、まさにそのときであった。正助の家から出火した炎が、彼らの足を引き留めたのである。この思いがけぬ事件によって､結果的には､百姓と役人の衝突は避けられたが､当然予想された抗争とそれを中止させるに足る事件の勃発とがあまりにも符合しすぎていた。**竜之進**でなくとも、この偶然に疑いを抱くのは道理である。

苔丸も、この突然の出火が正助の機智によって導かれたものであることを見抜いていた。と同時に、彼は正助が持ちまえの才能によって民衆から遊離し、独走するこうした解決方法を採ることに対立的な考えを持っていた。従って、苔丸の正助に対する非難は、たとえ正助一人の機転で事が解決しても、民衆の参与のない解決は前進的な真の解決にはならない、とするものである。この点で、互いに花巻村において指導的な立場にありながら、運動に対する二人の意見の差違があった。

ともあれ、当面の鍬下年季の問題は、藩からの正式な布令に先んじての正助ら各村々の代表者たちの連繋による延期嘆願によって、従前通り五年とされたが、藩では、この機を捉えて身分差別の徹底化とその再指令を行なったのであった。これによって、新田開発工事及びその後の収穫作業その他を通じて急速に発展した百姓と非人の間の豊かな協力関係は、再び有刺鉄線によって引き裂かれた。

一方、正助の主宰する勉強会で育った花巻村の子供たちも、現在ではそれぞれ若衆に成長し、若者組を結成して多方面での実践にその成果を発揮しつつあったが、長い間巧妙な封建支配のからくりの中で結果的に順応ともいえる錆を帯びた大人たちを啓発し、彼らからの完全な信頼を得るには、いまなお未熟であった。支配者の百姓に対する狡猾かつ残虐な支配の形は、一方で百姓間の協力精神を荒廃させ、他方でその協力精神を強いるという､もともと分裂､矛盾した論理によって百姓を骨抜きにすることを前提にしたものであった。もちろん、一方は、協同作業、集合合議等の協力関係から発展して、一揆や強訴等に及ぶ精神風土をその基盤から不毛化するためであり、他方は、苛酷な支配下に置きながら、なおかつ脱落者や不法者を未然に防止するための見せしめを含む連帯責任感の強要である。若者組の悩みは、こうした支配下に置かれ続けてきた大人たちをまず啓蒙しなければならないことであり、いわば自分の内に矛盾を抱く悩みであった。

アケミが玉手村の**五郎**を婿とりすることによって､悲恋の苦境に**ゴン**が立たされたことも､その一端の原因には、アケミの若者組に対する信頼度が充分でなかったからともいえる。だが、正助ばかりに頼ってはいられないとするゴンらによって、いま若者組は着々と育ちつつあった。

月刊漫画 **ガロ** 九月号 目次

表紙絵・**白土三平**

「聖域」について

上野昂志

たとえば、ワイセツという言葉なぞは、この国の総理大臣の意識を形容するのにもっとも適切な言葉ではないだろうか。

ワイセツとは、しばしば肉体の一部分に貼りついている一枚のイチジクの葉っぱをはぎとる行為のように思われているが、果たしてそうか。一般に考えられているのとは逆に、そのイチジクの葉っぱを更にプラスチックか何かでおおってしまうというような用心深さこそ、ワイセツなのではあるまいか。

大体、ワイセツという言葉は、全てのものが白日の下にさらされ、人々の視線を浴びることを最も恐れている秩序が投げつけたものにすぎない。それは、露出するという行為の方にあるのではなくて、露出されることによって全てが余りにも明白になってしまうことを恐れる、その恐怖のうちに存在するのである。支配する者にとっては、神秘は不可欠なものである。だから、その神秘を神秘たらしめている一枚のイチジクの葉を取り去ろうとすることを、「風俗を害する」、「善良な道義観に反する」ワイセツと呼ぶのである。だがたとえ雷が鳴ってもイチヂクの葉っぱを放すまいと頑張る行為そのものが、いよいよ支配の神秘をむきだしにしていく現実は如何ともし難いのである。

六月九日夜、「東京都公安委員会のデモ進路変更の条件は違法」という東京地裁の決定に対して、首相が、「神聖な国会の審議に圧力がかかるおそれがある」と異議申立てをした時には、思わずウッヒヒと笑ってしまった。「神聖な国会の審議」とは笑わせる。

支配者にとって国会とは一枚のイチジクの葉っぱのようなものではなかったか。それは、「多数決」という名の独裁をおおい隠すために、「民主的」に選出された者共が、「公平に審議」しているという錯覚を作りだすバタフライのようなものではなかったか。そんなことは先刻御承知のくせに、初心（うぶ）らしく、「神聖な国会の審議」などとのたまうしかもそのバタフライを、更に公安条例、公安委員会などというプラスチックでがっちりとふたをするに至っては、ワイセツの度も過ぎるというものだ。

だが、支配者がバタフライをつけ、プラスチックでおおいをすればするほど、私たちはそこに体制の恥部が存在することをますますはっきりと認識するようになる。そして、様々の防禦物に囲まれた立入禁止地帯の存在そのものが、逆吊りにされた私たちの状態を浮かび上がらせる。恵庭事件判決によっても、あるいは朝日訴訟裁判によっても、法律が支配者の欲するままに使われるという自明の事実を再確認することができるだろう。そこから、現にある秩序を維持するためには何でもする、という権力の姿勢が露出してくる。本来、私たちの生活に属すべき政治も法律も全て、支配者が自らをおおいかくす衣裳として使

用するようになってから、私たちは常に裸身をさらしていなければならなかった。にもかかわらず、その裸の私たちを恐れて、彼らはますます防禦を堅固にしようとする。五列縦隊のデモ隊をそれに倍する数で両側からサンドイッチにして走ってくる警官の塊は、まさしく支配者の恐怖の露骨な表現にすぎない。私たちは、十重二十重に自己を保護している支配者のワイセツな視線の中で　裸であることを悟らねばならないのだ。ところが、首相の異議中立てを批判する人達が次のようなことを言っているのは、どういうわけか。

「こんどの場合、デモの人数だって限られたものだし、はね上った学生のデモとちがって、責任ある政党の後押しする護憲連合のデモである。」（和田英夫明大教授、朝日新聞6月10日朝刊）

「届け出たデモの人数は千人くらいだった。これぐらいの人数が土曜日の午後、国会の裏通りを通るのに、警察当局は治安の自信が持てないのか。」（猪俣浩三の質問、朝日新聞6月14日朝刊、この質問に社会党席から盛んに拍手、と新聞にはある）

良識のある学者先生や国会運営のベテランである代議士先生たちが、この程度の意見をふりまわすのは当然といえば当然だが、しかし、彼らのワイセツぶりも首相ほどではないにしろ相当なものだといわねばならないだろう。これらの言葉の何処に批判があるというのだろうか。学者の方は、「はね上がった学生のデモ」という表現を使って暗に「静粛なデモ」と区別している。デモはデモでも「責任ある政党の後押しする」デモは「いいデモ」というわけだ。そして、その「責任ある政党」の代議士の方は、「千人くらい」の人間が「土曜日の午後、国会の裏通りを通る」のは「治安」にさしさわりがないだろうとくるから恐れ入った。一万人ぐらいが月曜日に国会の表通りを通るなら「治安」にさしさわりができるでしょうな。その時、先生は何と言うつもりですか。

デモが静粛であろうがなかろうが、それ自体はたいした問題はない。要は、そのような区別をし、「静粛なデモ」の方がいいという価値判断を下す「良識」が問題なのであり、又、「治安に自信が持てないのか」などと言って、相手の論理の逆を突いたつもりが、自分自身から「治安」の網の目の中に飛びこんでいくような秩序感覚が問題なのである。私のような「はね上がり」はこの先生たちのバタフライを観ていると、思わず「マジメにやれ！」と叫びたくなるのである。

権力が自らを擬装することによって、逆に自己の恥部をさらけだしている状況を一方の極とすると、もう一方の極に、国会はおろかデモにさえも無関係に、闇の中に消えていく死者たちを見ることができる。

首相のワイセツな異議中立てから一カ月ほど前、大阪府和泉市で病妻を看病していた80歳の老人が高血圧で死んだ。口をきくことも歩くこともできない中風の老妻は、夫の死を誰に知らすこともできず、死体の側で一週間寝ていた。彼女も又、夫の死体が発見された日の夕方病院で息をひきとった。和泉市福祉事務所次長は、「われわれとしては、どうしようもないところで、起きた事件だ」と言っているそうだが、老人自身も、生活保護を受けることを拒否していた。（朝日ジャーナル6・18）

「われわれとしては、どうしようもないところで起きた事件だ」というのは本音だろう。死んだ老人だってそれを否定しないだろう。それだけでなく、彼は生活保護も拒否することによって「どうにかできる」、「何とかお手伝いしている」という幻想さえ拒否してしまったのだ。そこにおいて彼は、「どうしようもない」地点から「どうにでもなる」支配権力を打つのである。

（67年6月16日）

■劇画講談■

なまけ武蔵

—晩年の武蔵—



水木しげる



寝てもさめても
「道」をもとめる
…………
楽しむことを知らぬ
緊張の連続………
それによって生ずる
いくばくかの虚名……
一体ソレがなんだ
武蔵は熊本にきてから
今までの自分のたどってきた
人生に疑問を感じて
いた…………



みろ武蔵先生だ
常に剣のことのみを考えておられるのだ
お前もああいう人間になってもらいたい
はい
大衆はあくまでも武蔵に「剣聖」を要求した。
……………
武蔵は人がなんと言おうと平気だという人間でもなかった。


そう言われて
みると
そうした期待を
はぐらかすのも
悪いような気がして
だまっていた。
生活してゆく上にも
そのままにしておいた
方がよいと思った。
武蔵はたわむれに、仏像の制作に着手してみた。
仏像を選んだことに特に意味はない。
当時、彫刻でもしようと思えば
それしか題材がなかった。


さすがは
武蔵だ
深い
「剣の道」を
求めておる
………
サラサラサラ
剣豪評論家は
武蔵が一貫した人生観を
もっておるものとみて、
なんでも剣に結びつける
のであった。
強いてこの行為を
意味づけるならば
剣(勤労)を尊ぶの
あまり、レジャーを
楽しむということを
軽蔑したために
大切な青春すら失って
しまったその悔恨が
仏像を刻ませている
のだ…………
トントン
カチカチ


武蔵は、生活のために「五輪書」もしたためてみた。
今までの己の生き方がたわいもないものであり人間の生き方としてまちがっていることに気づいたのだがそれは別に書き残さなかった。
いや、書き残さない方がよいと思ったのであろう。
大衆はそうした武蔵を剣一すじに生きるヘンな人間に勝手に作り上げてしまった。
そんなものを世の中の師表(世人の手本となるような人)であるかの如く言うものがあるが……
そんなことをまともに受けて生活した日には、かの晩年の武蔵のように悔恨の仏像を刻むことになろう。
完